

## 岐路に立つキューバを知るために（ライブラリー・コーナー）

著者	村井 友子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	201
ページ	48-48
発行年	2012-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00045891">http://doi.org/10.20561/00045891</a>

## 岐路に立つキューバを知るために

村井友子

一九五九年のキューバ革命から五〇余年の歳月が流れた。キューバでは、二〇〇八年二月にフィデル・カストロが健康上の理由から国家評議会議長兼閣僚評議会議長を退任した後も、実弟ラウル・カストロが後継者として統治を続け、社会主義国家体制を維持している。これまで、キューバ革命と社会主義国家建設、同国の政治・経済・社会の状況は、日本国内においてもジャーナリスト、研究者、社会活動家など多彩な人材により論じられてきた。その論点は多様だが、これまで政権を担ってきた革命第一世代が老齢化し、取り巻く世界状況が激変した今日、この国が大きな岐路に立たされていることは間違いない。本稿では二〇〇〇年以降に刊行された日本語図書のなかから岐路に立つキューバの現状理解に資する七冊を紹介したい。

研究者の分析結果をまとめた学術書である。序章で本書の分析の背景となるキューバの政治、経済、社会状況を論じたあと、第一章でラウル新政権の政治体制、第二章でキューバとアメリカの二国間関係、第三章でベネズエラのチャベス大統領のイニシアチブにより発足した米州ポリバル同盟（ALBA）がキューバの体制維持に果たしてきた役割、第四章で社会主義経済の移行問題、第五章で社会主義福祉国家としてのキューバ、第六章でキューバ社会における人種問題について分析している。キューバの最新動向を総合的に分析した類書は他になく、お勧めしたい一冊である。前書が主として二〇〇〇年以降を論じているのに対し、国際協力事業団国際協力研修所（現国際協力機構 JICA 研究所）「編『キューバ国別援助検討会報告書』（二〇〇二年）（URL：[http://www.jica.go.jp/jica-ri/publication/archives/jica/country/2002\\_04.html](http://www.jica.go.jp/jica-ri/publication/archives/jica/country/2002_04.html)）は一九九〇年代のキューバを分析し、日本の対キューバ援助政策に関する提言をまとめている。同書の推薦理由は、各分野について検討会メンバーが明晰な分析をしている点に加え、キューバのセクター・イシュー別概況が、キューバ統計局、キューバ中央銀行、国際機関の各種統計、学術書等を駆使してわかりやすくまとめられている事がある。情報入手が困難な同国の事情を考えれば貴重な情報源といえよう。提言によると、キューバは、被援助国としては後発発展途上国と位置づけられ、その持続的開発促進のために重点的に援助すべき分野は、「環境保全」、「食糧増産」、「生活環境インフラの整備」である。この提言に基づき、その後 JICA が各分野で実施した援助の調査報告書は JICA Library の蔵書検索データベースで検索でき、検索結果から本文（PDF）にアクセスできる。

同じく一九九〇年代のキューバを分析した著作に、新藤通弘著『現代キューバ経済史：九十年代経済改革の光と影』（大村書店 二〇〇〇年）がある。同書はソ連崩壊前後から一九九九年までのキューバの経済改革の実態を、キューバ国内で集めた資料をもとに分析したものである。光と影というタイトルが

示すとおり、経済改革の成果と同時に、経済モデルの行き詰まり、ソ連・東欧諸国の旧体制崩壊後のキューバの経済危機の深化の問題等が論じられている。

他方、キューバについては数多くの翻訳書が刊行されてきた。なかでもユニークな一冊に、キューバ教育省編・後藤政子訳「キューバの歴史：先史時代から現代まで」（世界の教科書シリーズ二八）（明石書店 二〇一一年）がある。本書は、キューバの中学校で実際に使われている国史教科書の邦訳である。先コロンブス時代の先住民の生活から革命後の国家建設の初期にあたる一九六〇年代までが対象となっており、一九世紀のスペインからの独立戦争、共和国時代の民族主義的革命運動、カストロらによるキューバ革命闘争に紙面の多くが割かれている。本書から、キューバ革命政府がいかなる歴史観を基づき歴史教育を行っているのか伺い知ることができ興味深い。

翻訳書のなかで近年刊行が相次いでいるのが、フィデル・カストロの評伝である。レイセスター・コルトマン著（岡部廣治監訳）『カストロ：The Real Fidel Castro』（大村書店二〇〇五年）はカストロと公私にわたり親交を結んだ元ハバナ駐在英国大使がカストロの生い立ちから二〇〇二年までを評伝した一冊、元 CIA キューバ担当官フライアン・ラテル著（伊高浩昭訳）『フィデル・カストロ後の確執とラウル政権』の戦略（作品社二〇〇六年）はカストロ兄弟を中心に据えたキューバ革命の分析書、イグナシオ・ラモネ編著（伊高浩昭訳）『フィデル・カストロ：みすから語る革命家人生』（岩波書店 二〇一一年）は、著名なジャーナリストが、「カストロ後」を意識して臨んだカストロの長時間インタビューをまとめた一冊である。カストロの目からみたキューバ革命とキューバを理解するうえで不可欠といえよう。

最後に今年六月刊行の『ラテンアメリカレポート』Vol. 二九 No. 1 でキューバ特集が組まれていることをお知らせしたい。こちらも併せてご一読いただきたい。

（むら）ともこ／アジア経済研究所 図書館 資料サービスマン